

メールレター (37)

ある雪の夜の出来事

モントリオールの長い冬が半分ほど過ぎました。そんなある日のこと、孫(長男の息子)から「和子ばあちゃん、卵焼きが食べたい」と電話がかかってきました。和風卵焼きが好きな、金髪のクルクルの、カールヘヤーの可愛い子ですから、ニコニコと目尻をさげ夕食に持って行くことにしました。かといって他の3人の子供たちも無視するとはできず、餃子をしこたま作り、それなりの量のオードブルができあがりました。

夕食の支度をしている長男も、ワインを飲みながら子供達と一緒につまんでいます。

「乾杯！結婚(再婚)おめでとう！」

「見て、これが婚約指輪で、これが結婚指輪なの。私、生まれて初めて、宝石の贈り物を貰ったの。」

パートナーは幸せそうでした。若い頃、プロテニスで世界8位を10年間保ってきたとはいえ、チャウチェスキューの独裁政治を逃れてカナダへの移住り、世界のテニス界で活躍するまでは、辛い厳しい道のりだったのかもしれませんが。16歳からは選手権大会で世界中を旅する日々やトレーニング、アメリカでの大学生活と、女の子の甘い幸せとは遠い日々だったのでしょう。その後、警官と結婚したものの、生活費や家の建築、子供の教育、家事と彼女一人で負担してきたようです。いつの間にか夫婦の格差は埋められないものとなり、別れることになったようです。きっと、どちらも幸せではなかったのでしょう。生きるとは難しいものです。パートナーは、金融業界で仕事をしながらも未だにテニスは続け、オーバーフォーティ(40歳以上)でカナダ一位を保っているようです。しっかり者の明るい子です。

ほろ酔い加減で話しが盛りあがってきた頃、牛フィレの切り身をお皿に乗せると、長男は、外のバーベキューで焼くからと、分厚いコートを着、ブーツを履いて、マイナス20度の庭に飛び出してきました。

「フライパンで焼けばいいんじゃないの。」

「バーベキューの方が美味しいよ」

ドアを開けるといつの間にか雪が降り始め、ブーツも埋まってしまいそう。。。しかも半端でない寒さ。バーベキューをセットして、駆けて戻ってきて、また乾杯。孫たちは入れ替わりやって来ては、話に交わり、つまみ食いをしては、また部屋に消えていきます。

しばらくして、またコートを着てブーツを履いて、長男は庭に飛び出していきました。

「やっぱり、温度はさほど上がらない。」

とがっかりして長男は戻ってきましたが、お皿の上のフィレのステーキは分厚く、ジューシーな焼き上がりでした。ポテトのソテーの付け合わせで舌鼓を打ちました。宵も深まり、酔い

の回ったドリトル先生は、昔話に一花咲かせていましたが、孫たちの就寝時間となり、老父婦は家路につくことになりました。

食べている間にさらさら雪が更に降り積もり、まだ進行中。あたりの景色は雪煙の中に消え、御伽の国にいるように、静かな白い美の世界です。と、ここまでは天国だったのですが、大通りに出ようとドリトル先生が、車のカーブを切ったその途端、アイスバーンの上に積もった雪にスリップをし、通りの真ん中の固い雪の山に車ごと乗り上げてしまったのです。車は見事に宙ぶらりん。外にどうにか出たドリトル先生は、激しい雪の中で思案に暮れていました。反対路線から、

「大丈夫ですか。バックして抜け出られなかったら警察に電話した方が良いよ。誰か救援を送ってくれるはずだから。」

そして、またもう一台。さらにもう一台と、見知らぬ人たちが、雪の降る中、次々と車を止めて、応援に駆けつけてくれたのです。

「トーリング車がないとそこからは出られないから。」

無事確かめると、そうアドバイスしてくれた人もいました。ドリトル先生が場所を確認して携帯で警察に電話した頃は、

「今トーリング車と警官が向かっていますよ。」

と警察の返事が返ってきました。

「誰かが電話してくれたらしい。」こちらの人達の何気ない親切には頭が下がります。

「あ、あれがそうかも。」

ドリトル先生は、手袋もせず、帽子もかぶらず、薄いコートのまま、また飛び出していきました。巨大なトーリング車が大シャベルを宙に浮かせて襲いかかるように近づいてきます。警官もやってきました。警官は外のドリトル先生には目もくれず、

「マダム、大丈夫ですか。怪我はありませんか。」

そうなんだこの国は、外で凍死もしかねない男性よりも、まず女性を大事にするのだ、と改めて思いました。

トーリング車はどーんと迫り、固い雪の壁をガーンガーンと打ち砕いて壊し、雪をよけて車の出口をつけると、車にチェーンをつけて引っ張りだしました。その間約20分。

「これで今夜は10台目です。」

警官は安全を確かめると姿を消しました。後は、トーリング車の高額な費用の支払いが残っているのは言うまでもありません。車も前が傷つき、修理を要するようです。何とも高がついた卵焼きの夕食会でした。

帰路は、アイスバーンと雪のせいで高速道路は、フラッシュをつけてはスリップを知らせる車の流れで、遅々として進まず、2時間ほどかけて辿りついた時には二人とも疲れ切っていました。夕食のステーキの栄養分は完全に消費尽くされていたのではないのでしょうか。

高額な税金を支払うカナダの暮らしですが、身の安全が守られ、人々は優しいと暖かい心に触れる雪の夜の出来事でもありました。